


8月18日 逍遙 

昨年の9月、第1回目のテーマ「西郷隆盛・抵抗の精神と9月のころ」を皮切りに始めたこの「逍遙館長的ころ」も、早いものでもうすぐ一年。

西南戦争の敗色が濃くなっていく中であって、西郷率いる薩軍が政府軍の包囲網から抜け出すため、眼前にそびえる険しい山・可愛岳（現・宮崎県延岡市、標高728m）の絶壁をよじ登り、脱出に成功したのが、今日8月17日夜から翌18日未明にかけてのこと。その際、西郷は、戦闘によって右足に重傷を負っていた長男・菊次郎（のちの京都市長）と従者の永田熊吉に対し、政府軍側に投降するよう諭したとされています（ちなみに、隆盛の弟・従道は政府軍側）。一方、四つん這いになって絶壁をよじ登っている姿を、西郷が「まるで夜這^{よばい}のようだ」と言って一同を笑わせた、というエピソードも残っているそうです。

実はそのちょうど4年前の、まさに同じ今日8月17日は、岩倉使節団派遣中の留守政府によって西郷の朝鮮派遣が閣議決定された日だったのです。

西郷にとって今日8月17日は、真逆の展開を象徴する日となったのでした。

次回「今度こそ聞いてみよう、のころ」

「真逆をも超越する
西郷隆盛の魂、のころ」